

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿〈5月10日（金）放送分〉

テーマ「奄美先人の知恵」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今週は、毎月第2週に、奄美の文化・暮らしにおける先人の工夫などを紹介する「奄美先人の知恵」の2回目です。

今年は、奄美群島日本復帰60周年の年です。この日本復帰の節目の年に、これまで「郷土の先人に学ぶ」という児童・生徒用副読本が発行されています。昭和54年3月に、復帰25周年の記念として上巻が発行され、翌年に下巻、翌々年に続編の3巻が発行されました。その後、40周年と50周年に1巻ずつの合計5巻が発行されています。

今朝は、この『郷土の先人に学ぶ 第5集』から、「奄美経済界の重鎮 南海の海運王 有村治峯」を紹介します。

有村治峯は、明治33年に与論町茶花^{ちゃばな}で生まれ、小学校を卒業するとすぐに、名瀬の白石^{しらいし}商店に住みこみで見習いの仕事を始めました。母親のしつけは厳しく、「仕事は陰日向なく（人が見ていても、見ていなくても）真面目にやれよ。人の悪口を言ったときは小さく曲がって（反省して）寝なさい。人に悪口を言われたときは大の字になって（自信を持って）寝なさい。」と諭^{さと}されて、一生、人のうわさや悪口を言いませんでした。

治峯^{はるみね}は白石商店で5年間、商売の道を修行して22歳で独立し、黒砂糖^{なかがい}の仲買と大島紬の製造販売を始めました。最盛期には年間3500反^{たん}も生産する実業家となり、大島紬工業組合の理事長にも就任しました。また、黒糖についても、島民の生活を守るためにはキビ栽培を一番大切にすることが自分の仕事だと考えて、地元の与論町に大型製糖工場の南島開発株式会社を設立して貢献するとともに、北大島地区の笠利町でも富国製糖株式会社の経営を引き受けて、奄美特有の産業を育てることに力を尽くしました。

しかし、奄美諸島が二・二宣言で本土と分離されていた時代は、本土との取り引きは外国並みのあつかいを受けていました。大島紬を売りに出すためには100%の税金がかかり、黒砂糖は輸入禁止品目にきめられていて、奄美で一番中心になっている産業の大島紬と黒砂糖は島の外に出すことができませんでした。そのため、当時の米国軍政府と話し合いをするために日米貿易使節を送ることになりました。その代表として、当時の政庁副知事であった笠井純一^{かさいじゅんいち}、経済界代表として有村治峯、農業会代表の久保井米栄^{くぼいよねえい}の3名が東京に行き、GHQ（連合国軍総司令部）をはじめ政府や国会に奄美の様子を訴えました。そして、4か月にわたる交渉の結果、大島紬も黒砂糖も本土並みの取引が再開されるようになりました。

また、遠く離れた奄美諸島は、本土と奄美、そして沖縄を結ぶ海上の交通が生命線です。治峯は若い頃から海への関心が強く、いつの日か安全で気持ちのいい船旅ができる日を望んでいました。それまでの奄美を通る船は本土の船会社だけだったので、どうしても地元の船会社を作りたいという願いがあったのです。そして、昭和28年12月、日本復帰をいい機会だと思った治峯は、大島運輸株式会社を設立して海上交通の業界にのりだしました。そして、次々と大型貨客船を就航させて、島の人たちがいつでも本土や沖縄に行けるようにしました。その間にも、航路数の確保や船舶建造の資金面などで苦労が多かったようです。それでも、喜界や瀬戸内など喜界航路と言われている航路で、もっと船が行き来できるようになればいいと考えていた治峯は、当時の総理大臣 田中角栄の自宅を訪問し、直接交渉して援助の許可をもらいました。

さらに、一年間の降雨量が少なく干ばつに見舞われ、年によっては飲み水にも不自由していたサンゴ礁の島である与論は、水の確保が大きな課題でした。治峯は、「われわれは、昔、海水から水分を蒸発させて塩をつくる方法を先祖から学んだ。今度はわれわれが塩分を含んだ海水や地下水から、塩分だけを取り除いて真水をつくる方法を研究すべきだ。必ずできると思う。」と主張しました。当時は変わった考えだと思われていましたが、40年後の平成13年に、与論島で県内初の「海水淡水化施設」が完成し、海水を真水に変えられるようになりました。

治峯は、平成12年6月15日の百歳祝いのときに、「自分の^{こんにち}今日を築いた源」として、三つのことを話されています。その一つは、小学校までしか通えずに、学歴がなかったことで、人一倍努力していろいろな人と話したり人の話をよく聞いたりして、知らないことを覚え、六法全書などを何回も読んだことです。二つ目は、家が貧乏だったことで、何事もがまんすることを覚え、お金や物の有り難さと値打ちがわかったことです。三つ目は、両親から丈夫な身体をもらったことで、長生きすることができ、両親への感謝の心を持つことができたことです。

治峯は、年をとっても常に前向きな姿勢で、後輩を励ましていました。

この項の執筆者、^{くすだ とよはる}楠田豊治さんは、「奄美は昔から人材の島といわれており、現在も日本の各界で活躍されている先輩方がいらっしゃいますが、治峯さんは、島で生まれ、島で育ち、島の中で大きな事業を起こし、南海の海運王と言われるほどの大きな事業を残されました。このことはわれわれ^{しまちゅ}島人の誇りであり、指標です。」と結んでいます。

先を読むすばらしい洞察力をもち、行動し、現在の奄美の経済の基盤を築いたとも言える、偉大なる先人に尊敬するばかりです。多くの郷土の先人を紹介している『郷土の先人に学ぶ』を、ぜひお読みいただきたいと思います。

以上、鹿児島県立奄美図書館でした。